佛教ぎふ

発行　昭和59年８月１日
岐阜県仏教会事務局
岐阜市西野町3丁目1番地
岐阜西別院内　TEL ㊥7803
編集　出版委員会
１部送料共　80円

再度大法要団の訪韓

気運高まる「花まつり」復興

五月七日――十日

岐阜県仏教会と檀信徒会では、先ごろ昨年に続いて韓国釈尊花まつり・仏跡巡拝親善法要団（杉山令肇団長）百七十人を派遣、仏教を通じて交流を深めてきた。

韓国の花まつりは、一千数百万といわれる仏教信者の年に一度のお祭りだけに、行く春に別れを告げる行事として、みんなで祝う〝しきたり〟といったものを感じさせる。各寺院で行われるおごそかな法会は、どこも早朝より信者であふれ、特に若い人達の姿が目につく。しかし何といっても圧巻は、各地に散在する千七百余という寺院を管理する元締めであり、仏教界のいろいろな重要儀式や催事を行っているソウルの韓国曹渓宗の総本山である曹渓寺での花まつりちょうちん行列への参加である。陰暦四月八日は〝お釈迦様の誕生日をお祝いする日だから祝日に〟という国民の要望を政府が認めて決まったといわれ、当日は両親に旅行券をプレゼントする〝孝道旅行〟が盛んで、そのほかおいしい物や品物を贈ったりして仏誕日を祝う。又早朝から青少年を中心に〝自分たちの街を美しくしよう〟と美化運動を通じて公徳心を養っている。このように広く仏教の教えである〝報恩感謝・自行化他〟の精神が民族の中にしっかりと定着している。十万余の人々が、それぞれ一個づつのちょうちんに、感謝と幸運の願いを託す、この素朴な国民的行事をまのあたりにして、わが国の宗教、教育、青少年問題等を考えるとき、是非とも花まつりを復興したいと願わずにはおれない。さいわい本県には、仏教系の幼稚園や保育園、私学も多いところから、とりあえず来年度以降岐阜市を中心として、一般や政財界の方々にも協力をいただき、この運動にふみだし、全県下に広げていくという気運が高まっている。それを第一歩に、全日仏を通じて、花まつりの日が国民の祝日となるよう運動を進めたいものである。

花まつりの行進風景

韓国の花まつり

ソウル市内の大河漢江に宵闇が迫ってきた。川辺の大広場を出発、片側四車線という広いメインストリートを、中心街にある総本山曹渓寺迄の四粁近い大行進である。最初に数人の僧侶を先頭に、手に色とりどりの提灯を持ち白象や宝船などさま〳〵な出し物を曳き、口々に「ナームシャーカムニブツ」と念仏を唱えながらの大行列。これが幼稚園児から小中高大学の青少年が大部分で、一団づゝあとからあとから夜半迄延々と続く。一〇万余の仏教信者がこの行列に加わり、数百万の群衆がこれに参加するという。只々驚嘆するばかり、荘厳というか何か神秘的な深い感動を覚えたのは決して私だけではない。自分の健康、家族の安全、祖先に感謝という切実で素朴な祈りで現世利益の強い信仰の表現行動であろう。

陰暦四月八日を釈迦降誕を祝う日として、国の祭日とし全国休業日になっている。

二千以上有る全国の寺では、仏誕会がおごそかに行われ、色々な提灯を作り華やかに飾り「塔まつり」「観灯祭」「提灯行列」と賑やかな行事が行われる。千数百万人といわれる韓国仏教信者が自分の名前や家族の名前を書き入れた思い〳〵の提灯を作り、行列をしたり寺に納めて、年に一度の行事に参加し、一年の幸運を祈り、逝く春の一日を楽しむのである。この起りは朴大統領が、キリスト教が急激に盛んになり、本来の仏教の衰退を憂いて、国の祝祭日としたのが始りとのことである。今回の一七〇名の親善法要団も、この「花まつり」に参加するのが主目的でもあった。

周知のように仏教は釈迦の教が、印度から中国を経て韓国に入り、百済を過ぎ、欽明帝の時わが国に伝来、聖徳太子に依り広く全国に広まり、幾多の高僧に依って一段と隆盛になり今日に至っている。

日本の正月の初詣でや縁日に多勢の人出でごった返す。深い信仰からではなく、何んとなく願いごとをしてお詣りし、賽銭を投げ、おお守りや、おみくじを求めて帰って来るのが大部分で習慣というか形式的になっているようだ。それに比し韓国はこの「花まつり」を国家的行事とし、提灯に幸福を求め、強く確乎たる信仰によるものと誠に仏教国にふさわしいものだと痛感した。

韓国同様本来の仏教国であるわが日本も、「花まつり」を是非共復活し盛んにしたいものである。我々の子供時代甘茶をお寺へ貰らいに行ったなつかしい想い出がある。

岐阜市でも仏教会が中心で十数年前迄柳ヶ瀬（近鉄北）に灌仏のお釈迦様をかざり、幼稚園児が白象を曳いて行進を行っていた。その後交通事情等で中断されている。この際仏教会檀信徒会が主となり、市民運動として、全市全県下に呼びかけ、具体的方法はよく検討し何んとか復活させたいものである。

出来れば韓国同様、一年のはじめでも有る春の一日を「花まつり」の日として国の祝祭日に制定する運動を起こしても、決して行き過ぎではないと思う。それが混迷の現世相の中で仏教興隆の一助ともなり、青少年の健全育成にもつながるものと確信している次第です。

横山公一
（岐阜市檀信徒会副会長）

去る五月七日より十日まで三泊四日の旅程で第三回韓国釈尊花まつりに参加して先ず感じた事は、韓国僧侶の戒律の厳しい事と仏教徒が若い人達によって占められ、敬虔な仏陀を敬う態度に感心しました。

今年は一月違いの五月八日が旧暦の四月八日で五月八日午前六時にホテルを出発し曽渓寺に参拝した。韓国仏教は禅宗で寺院は概ね山の中に在って規模も大きい、曽渓寺のみはソウルの中心街に在り寺の縁起によると五十年程前に他所から移築された物との事で、八時過ぎには参拝の人で、ごった返して、とても団体では、寄り付けるものでは無との事で六時の参拝となった。こゝで驚いたのは本堂の仏像の立派な事で、丈六仏の釈迦如来像は金箔の堂々たる像で背後の壁画と共に日本仏教文化のルーツがこゝに在りとつくづく感した。私達はご住職の好意で本堂に入いり讃仏偈と般若心経に百七十余名の大合唱は流石に広い本堂に韻々と木霊して、蓋し荘観でした。韓国では釈尊降誕日は国の祝祭日として家庭に於いては孝道旅行の日と定められ子は親に孝行をする風習が定着しクーポン券を作って両親に贈り、この日は老人は旅行に、若い人はお寺に参拝するのが韓国仏教徒の家庭である、私達は終日ソウル市内を観光し日没を待って提灯行列に参加した。ソウルの日没は日本時間にして大へん遅く午後八時近くなって漸やく白象を先頭に第一陣が見え始めた場所はソウルのメーンストリートで道路巾は目測で百米以上はあると思うが実に掃除が行き届きタバコの吸い殻一ツ見当らない、その大通りを完全に交通規制を実施し両手に提灯を持ち一個集団つつの大行進である。

韓国では提灯に家族の名前を夫々記し家内安全を願うのが仏教徒の基本で、日本の故人の冥福を祈るのとは、こゝが違う。又若い女性の民族衣裳（チョゴリ）は実に美しい。袴を胸高にキュッと締め口々に『ナームシャカムーニブツ』と集団毎に唱へ乍ら行進する姿は実に印象的であった。行進はあとから続々と続き広い道路は提灯と人で埋まり。

その数は十数万人と謂われ、筆者はこの出発点曽渓寺の状態はどんなものか又この大行進の落ち付く所はどうなるのか疑問を抱きながらソウルの夜は更けて行く。

臼井重清
（岐阜市檀信徒会副会長）

全日本仏教徒会議
第31回京都大会開催

今秋十月二五日（木）
会場　東山知恩院にて

第14回ＷＦＢ大会

今夏8月2日～11日
スリランカでひらく

第十四回ＷＦＢ大会（世界仏教徒会議）は昨年十二月にインドネシアのジャカルタで開かれる予定だったのが、現地の事情で急に中止となった。それでこの八月二日より十日間、スリランカの首都コロンボ市で開催される。大会のプログラムには、キャディのお祭りとして有名なペラヘラ祭りの見学も含まれている。

旋風打

▽「軽薄短小」ということばが流行しているそうである。重いものものしいものがもてはやされる時代ではないのである。

▽だが、私たち人間それぞれまでが「軽薄短小」になってもよいものであろうか。

▽民主主義は、多数決を原理として成立ち、歴史も一人の英雄だけではなくある程度の多数の人数、人間の量や、組織により動いてゆくものだとされる。

▽一方、学生は○・×や「偏差値」によってはかられ、人間がコンピューターにより管理されるような危険性もしのびよっている。

▽これらは私たち人間が数量化され、平均化され、没個性化し、人間が人間らしさを失いつつあることを示しているようである。

▽ぎすぎすした社会、非行、非情な犯罪、さまざまの公害、核戦争の危機なども、人間らしさを失った人間によってもたらされ、それが要因となってはいないか。

▽「国連憲章」や「憲法」などには基本的人権の尊重がしるされているが、私たちはその前に、それより先に、数量化や、平均化によって、人間らしさを失って存在し行動している私たち自身を見つめなおさねばならぬと思う。

▽「一人のいのちの尊さは地球よりも重い」という。人間は何よりも個性的であり「人格者」として存在する。

▽「仏」「仏陀」というのは神とちがい、さとった人或いは人格を完成した人という意味であり、また「如来」というのも、真理に到達した人、或いは真理に従ってこの世に来り真理を示す人の意味である。

▽私たち人間は、そうした人格の完成者たるみ仏を仰ぎ、帰依し、またすべての人がやがて仏になるべき人としての世界を見失ってはならない。

（藤田）

祖先を敬い
父母を
大切に
明るい家庭を
きずくために

夏やすみには

みんなで
お経を
習いま
しょう

主催　岐阜県仏教会
　　檀信徒会
協賛　全日本仏教会

日本最初の栄叡大師碑参拝団訪中記

垂井仏教会名誉会長　廣瀬信夫

地蔵菩薩
子どもの守本尊
宗派をとわず馴染み深いのがお地蔵さんです。
お坊さんと同じ円頂で袈裟と衣をつけ、右手に錫杖、左手に宝珠をもった石の地蔵さま、所々に見られる地蔵様

大心義尚

天平時代（七四三）奈良の東大寺に栄叡（ようえい）と云う傑僧がいて遣唐使の一員として今の西安（当時長安の都）に入り、入唐留学僧として各地で高僧を求めて修業した。その任務は、仏教は既に日本に伝来した。けれども正式の僧を養成する指導者もなかった。儀式も整っていなかった。戒律の指導者もなかった。したがって栄叡大師は唐に渡って、自身の修業と共に高僧たる指導者を求めて日本渡航招請にあたった。長安の都を中心に十年の修業の後、ついに揚州の大明寺において高僧鑑真和上に謁することができた。栄叡大師の懇願は結果としては命を失ってまでの熱意であった。このため十二年の歳月と五回の渡航に失敗し、六回目の渡航に沖縄を経て鹿児島県に上陸、東大寺に到着されたのである。この時疲労と苦難のため己に盲目の身となっておられたが、勅命によって、戒律相伝の祖となられたのである。この教によって歴史の名僧が続出した。

三回目（七四五）の渡航の時だろうか、難波して逆に南の海南島に漂着した。一応出発点の揚州大明寺に引き揚げるには陸路何百キロの行程である。北上の旅の途中栄叡大師は広東省肇慶市鼎湖山白雲寺において疲労のため病没された。これによって鑑真和上の日本渡航決意は不動のものとなった。

爾来千二百有余年、日本ではあまり知られなかったことが「天平の甍（いらか）」と云う歴史小説や映画によって、事実と事実とをつなぎ合せた創作ができて世に知られて来た。

しかし中国では栄叡大師の事跡はよく知られていた。その病没された肇慶市鼎湖山に中国側仏教会によって大師の記念碑が建立されている。それは今から十九年前のことである。

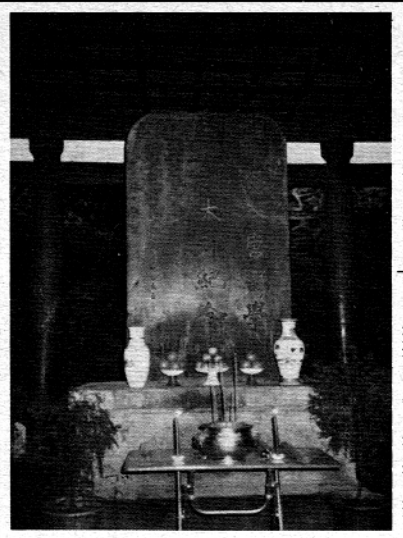
さらに中国では高く評価され、北京市と広州市にある歴史博物館に栄叡大師記念碑の写真が展示され、説明には『日本国美濃之国の入唐留学僧……』と明記されています。

今から五年前岐阜市と杭州市が友好都市の締結をした。それがきっかけで交流が盛んになり、杭州市と肇慶市とは可成りの距離にあるにもかかわらず。栄叡大師の記念碑の写真まで届けられてきた。それから岐阜市や県の友好協会では、仏教は昔戒律から始められたとも云えるから、日本仏教の源流を訪ね、栄叡大師の霊前にぬかづき、千二百五十余年前の御労苦と偉業を忍び、且は中国仏教会に対する謝意を表するためにも参拝を企画する議があった。

たまたま本年は岐阜市杭州市友好都市五周年に当るので、その記念事業の一環として「栄叡大師顕彰岐阜県友好訪中団」が結成された。仏教を通じての友好親善の行事であるから岐阜県仏教会長へ訪中の依頼があったが会長は韓国仏教会その色々の関係で訪中できぬ事情にあった。そのため不肖僧侶として、岐阜県仏教会代表、並びに訪中団副団長として、代行をつとめたので、極めて感概深い旅をした。出発は四月十三日大阪空港から香港経由広州市に飛んでそこで一泊、広州市と目的地肇慶市の碑のある所までは自動車で約二時間余りの距離だが中間に珠江と云う大河をフェリーで渡る時間が長いので三時間以上を費すがこれも亦一興であった。肇慶市に入るや、副市長以下数名の出迎えの礼を受け丁重な歓迎の挨拶の上、栄叡大師の記念碑へ先導された。碑は青天の雨ざらしと思いの外立派な堂内に建てられ清掃は勿論、供物も多くローソク、線香も立てられ、準備万端整へられていた。只立派な一対の献花の用意だけがされていましたので、共に副団長を勤めた梶浦宗覚氏と一束づつ献花焼香のあと、勤行に入った。バスの中で充分勤行の練習かしてあったので極めて厳粛な勤行の間に団員二十二名が感激の中に一人一人焼香礼拝（らいはい）した。この碑は山の中腹にある鼎湖（ていこ）山慶雲寺という大寺院の管理下にあり同寺から数名の僧が何くれとなく用意萬端整えて呉れたのであった。尚堂前の両側に記念植樹の用意がされ、立札に「栄叡大師顕彰岐阜県訪中友好団、記念植樹」と大書し、鍬入れの光栄に浴した。

終って鼎湖山慶雲寺に参詣、全員客殿に案内されたのであるが、本堂より遠い大門（だいもん）前まで、八十八才の老住持（じゅじ）縊空（いくう）師の出迎まで受けて一同恐縮感激した。一時間近くの交歓談話に移ったが、住持の説明で判ったことは、栄叡大師が何度もの渡航の失敗と再計画、陸路の疲労等で病気となりこの山を更に登った白雲寺で静養中没せられた。碑は白雲寺へ登られたその道路の傍に建立されたと云うことであった。尚全日本仏教会長、智恩院第八十五世門主藤井実応台下のメッセージを伝達し、通訳を通じてその意を述べたところ、更に更に大歓迎の辞をくりかえされ「栄叡大師は千二百余年に亙る長い間皆さんをお待ちかねになっていました。その仏教徒の団体の第一陣であります。中国でこれ程有名な栄叡大師のことは日本ではそれ程知られていないようでありますが、この機会に仏教を通し、大いに交流を深め日中友好親善を基に世界平和に寄与したい」「全日本仏教会長、藤井法師にくれぐれもよろしく」と解せられる言葉があり、一同知らなかったとは云え中国仏教会に申し訳がないやら、仏教を通じての日中友好親善の実を挙げることが大切なことを痛感した。肇慶市には、近くに七星湖と云う景勝の地や端渓の硯工場等の観光地は訪れる人もあるが、市や仏教会で重視している栄叡大師の碑のある慶雲寺を訪れる外国人は少い。しかし中国では有名である。私共が栄叡大師碑前で読経中、中国の参拝や観光の人々で黒山のようになった。この地区一帯は国連の自然保護区に指定されているので仙境にでも入った気分だった。肇慶市は別に友好締結の都市も無いが栄叡大師顕彰訪中国であったためか、市主催の大歓迎宴に招待され市役所の要人はもちろん、若い七人もの女性職員には上品で華麗な揃いの新調服を着用させ、礼儀正しく極めて愉快な対応に接したことは国賓にでもなったような気持に酔わされた。翌十五日の午前中は七星湖の風景の鑑賞をしたが、ガイドや通訳の外に市の要人達が加わっての待遇で、心から別れを惜みつゝ広州へ向った。十三日の長い間まちにまっておられた日本仏教徒の参拝団が初めてやって来た。それも日中友好協会の企画によるものであると思えてならなかった。中国の歴史では栄叡大師は美濃の国の僧とある。かつて中国大使館からの調査依頼もあったと聞く。揖斐川町か各務ヶ原市の出身者ではないかと云う想像説もあるようだが何の証拠もないらしい。私共美濃の国の者としては、どうしても究明したい。心ある方々。御協力によって、どんな些細資料でも集めたいと思います。御協力を願います。

紙面の都合で肇慶市の分のみに止めました。



写真は栄叡大師記念碑

藤井全日仏会長のメッセージ伝達

清音

田辺祥子

「久隔二清音一
馳恋無レ極
伝承二安和一
且慰二下情一」

先日、京都の博物館へ平安時代の美術を観に行った際、その余りに優秀な美術から受けた感銘を、私独りの喜びとしておくのが、いかにも勿体ないような気持ちがしてならなかった。それで、岐阜に山ごもりされている旧知の許へ、絵葉書に、

生涯、またとあうことができない果報と存じましたどうぞ、是非一度、御観賞なさいますように。

と、こう書き送りましたところ、急遽上洛を思い立たれ、一日、博物館を鑑賞の上、その帰えるさ、「空海の書簡の一部ですが、感銘深いものでしたから」

と、前掲の一文を私への礼心にと書いて送って下さった。というこんないきさつは、一向、おもしろくもない話ですが、私にとっては、これほどうれしく読んだことは久しくなかった。涼々と音をたてて流れる清水が私の魂をうるおした感がして、たとえようのないよろこびを味わった。

心をうるほすような話のついでに、京都での話をもう一つつけ加えよう。それは京都の水といっても加茂川の流れとか、風流なことでなく、下京の街の中で、しかもゴミゴミした長屋の前のドブ川の話なのです。

ある秋の夕暮れ時、そのドブ板の上で、故人になられた先生が、真白いおひげをしごきながら感概深げに耳をすまして、じっとたたずんでおられるのを町の人が見とがめて「先生、今頃何をお考えになって、そんなところにお立ちですか　と不審げに問いますと、先生は静かに、

「私は、別に何も考えていませんよ。ただ、私が今、このドブ板を渡ろうとすると、この下でさらさらと水の流れる音がしますので、本当に美しい音だと感心して聞いているのです。」と答えられたと、

また、耳を傾けて、そこに立ちつくして聞いておられたという話なのです。

心が美しいとか、やさしいとか申しますが、久しい間、ほとんど京都時代のこんな心を感じずに過して来た。美しいこと、やさしいことを忘れさったのではなかったけれど、日常生活のくらしの中で、心ない為に聞くべきものを不レ聞、見るべきものを不レ見してしまっている愚かさを、今さらに反省され、誠におはずかしい歳月だったと思う。

今、しあわせにして、旧知の清音に接し、魂の喚び声を聞く思いで、有難く、うれしかった。久しく隔ったのはもう何十年になる。終戦前后のめまぐるしい世相のうつりかわりに遭遇して、生きる信念さえ見失いがちな私を、さとしみちびいて下さった旧知の方々の恩愛が、今は実になつかしい。遠慶宿縁とでもいおうか。過ぎ去った歳月を回顧しているこの頃であります。

○

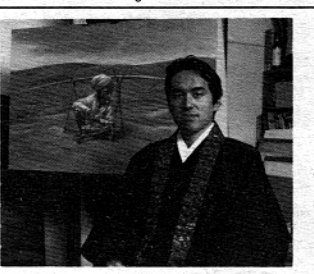
園城寺管長に山本師

五月十日、天台寺門宗の本山、三井寺山園城寺の六代目管長に岐阜市神田町一天台寺門宗正覚院の山本光照住職（七七）が就任した。

山本師は昭和四十二年から十三年間、同宗宗務総長。五十六年から宗機顧問を務めてきた。大僧正。

天台寺門宗は天台宗系の宗派。昭和二十一年天台宗は分派したが、そのなかでも天台真盛派に並ぶ主な宗派。全国に約二五〇寺院、檀徒数は約十万人。県内には八寺院がある。

小笠原宣さんに安井賞



画壇の芥川賞ともいわれる「第二十七回安井賞」に岐阜市大門町にある真宗大谷派上宮寺の「ワカさん」小笠原さんのアクリル画「行」が受賞した。

この賞は、過去多くの人気画家を生み出しており、新人の登竜門として大変な権威を持っている。今回、初出品で初受賞。だけでなく岐阜県で初めて。三十一歳という年令も最年少と、まさに記録づくめである。

岐阜市制90周年展では海外遊学特別賞、岐阜現況展では洋画部門賞を受賞している。この現況展での作品が認められ、岐阜県美術館の推薦で安井賞に出品、安井賞画家の誕生となった。

なお小笠原さんの人となりや、作品などは月刊誌や週刊誌、新聞、テレビ等で大きく取り上げられ、評判となり、各界より今後の一層の活躍が期待されている。

県内各地のうごき

○各務原市
四月八日、花まつり（於スーパー・イズミヤ各務原店）主催、岐阜地区曹洞宗青年僧侶（県青雲会）

○美濃市
五月五日、花まつり、市内を白象を引き、文化会館に於て花まつり行事、第二部として映画〝ふるさと〟上映

○本巣郡
四月二十四日、総会並びに戦没者追悼法要。会長に橋感月師（僧）、林治雄氏（俗）再選、本会理事を辞任した藤原順道師に感謝状贈呈、（於北方町円鏡寺、参加六十余名）

○中津川市
四月二十四日より二十七日まで、恒例の西国三十三ケ所霊場巡拝

五月八日、福昌寺にて灌仏会、白象の市内パレード、参加児童、一三六九名

第十五回お経を習う会
八月初旬予定

○揖斐郡
四月二十四日、総会並び講演会、二百名参加（於池田町善性寺）

八月二十五日、戦没者追悼法要（谷汲村長瀬善立寺）予定

九月二十六日、戦没者追悼法要（揖斐川町三輪大乗寺）予定

「お経を習う会」。予定
十一月上旬「秋のつどい」講演会　大野町にて予定

十一月上旬、仏教標語を募集し、街頭ポスター印刷し掲示の予定

○益田郡
五月二十九日、総会
寸語ポスター発行（六月、九月、十二月）

七月十九日、サニーランド（老人ホーム）慰問

十一月、文化財見学

十二月、助け合い運動（托鉢募金など）

○岐阜市
厚見校下　七月上旬、檀信徒会役員総会開催

八月中旬、檀信徒会総会、「お経を習おう会」の反省、会員物故者追悼法要予定。

本荘校下　六月二十五日、バス三台にて、愛知県三河地方の七福神巡り実施

八月上旬、「お経を習おう会」、参加者にはノート、鉛筆等贈呈。

毎年十月第二日曜日、会員物故者追悼法要

木の本校下　五月二十五日、物故者追悼法要と総会、参加者一四〇名（於法隆寺）

映画、法話、余興

黒野校下　五月三日、花まつり、戦没者追悼法要、幼稚園児、保育園児らと共に白象にて街頭行進。甘茶接待

京町校下　四月二十七日、会員物故者追悼法要、花まつり、総会。ルンビニー園復興募金（於西別院香光殿）

網代校下　四月八日、花まつり、白象行進、法要、甘茶接待、戦没者追悼法要、会員物故者追悼法要（春の彼岸）、その他「お経を習おう会」、「托鉢」など。

本郷校下　五月六日、湖東三山参詣、参加者五十九名

六月三日、物故者追悼法要、総会、一七〇名専願寺

紙面の都合上、原稿・写真を割愛し、おわびしてお礼を申し上げます。（編集子）